【論　文】

ドイツ第三帝国下の日本美術史研究とユダヤ人研究者

安　松　みゆき

はじめに

ドイツ第三帝国下においてドイツは日本と最も親密な関係を結ぶ。ドイツにおける日本美術研究も、その政治的な援護を受けてこの時期に一番盛んにすすめられ[1)]、それが結実したかたちで1939年に「伯林日本古美術展覧会」が開催された[2)]。

この第三帝国下ではまた、20世紀において最も悲劇的な結末を与えたとされるユダヤ人への迫害も行なわれ、美術の世界も例外ではなく、それは退廃美術展に象徴される。後述するように、ドイツの日本美術研究の進展にはユダヤ人がかかわり、しかもかれらの貢献は無視できないものだったが、従来その実状について詳細にとりあげたものは管見の限り見当たらない[3)]。近年のドイツでは、ギュンター・ハーシュ等によって戦前の日本文化交流の考察のなかでユダヤ人の問題が検討されたものの[4)]、その際に日本美術関係者については史実の指摘にとどまり、具体的な考察にまで及んでいない。また日本でも国府寺司氏を筆頭に西洋美術史とユダヤ人の関係に注目した研究が着手されはじめているが[5)]、しかし、日独美術交流の考察にはまだ至っていない。

拙論では、そのような研究状況を鑑みて、特に日本美術の領域に限定して、ドイツ第三帝国時の錯綜とした状況のなかでユダヤ人との関係から見ると、日本美術の研究はいかなる様相を示したのかを考察する。まず当時の日本美術研究のなかで活躍したユダヤ人の存在と、かれらの研究上の特徴を概観し、つぎにユダヤ人の亡命によって日本美術研究にいかなる変化が生じたのかを、第三帝国支配下での政治的日独関係強化の流れと比較しながら検討する。最終的に、日本美術研究の変遷とともに、部分的ながらユダヤ人が日本美術研究に果たした役割と意義を明らかにすることが拙論の目的である。

1．20世紀前半における日本美術研究とユダヤ人

1．1．日本美術とユダヤ人

ハーシュによれば、日独文化交流にユダヤ人の研究者や関係者が多く従事した[6)]。その指摘を踏まえ、第三帝国時を含む20世紀前半で日本美術に関係するユダヤ人をアルファベット順にとりあげると、以下のとおりとなる。

ウィリアム・コーン（William Cohn）、グスタフ・ヤコビー（Gustav Jakoby）、ヘルベ

ルト・ギンスベルク（Herbert Ginsberg）、クルト・グラーザー（Curt Glaser）、パウル・フォン・メンデルスゾーン＝バルトルディ（Paul von Mendelssohn-Bartholdy）、F.W.K. ミュラー（F.W.K. Müller）、オスカー・ミュンスターベルク（Oskar Münsterberg）、オスカー・ナホッド（Oskar Nachod）、エミール・オルリク（Emil Orlik）、フリードリヒ・ペルツィンスキー（Friedrich Pertzinski）、ヨゼフ・シュトスゴフスキー（Josef Stryzgofsky）、フェリックス・ティコティン（Felix Tikotin）、カール・ヴィート（Karl With）。

これら人物に対してハーシュは名前の指摘で終わっているため、関連資料を参照しながら下記にかれらの出自等を概略する。なおかれらの出身と亡命に関する一覧表を「表　日本美術に関係するユダヤ人」として作成している【表】。

ウィリアム・コーンは日本美術史家かつ東洋美術史家で、1880年にベルリンに生まれ、ベルリン、パリ、エアランゲンの各大学において美術史を学んだ[7]。1929年から1933年までベルリンの美術館において学芸員として従事し、1938年にイギリスに亡命以後はオックスフォード大学で東洋美術を講義し、また同大学東洋美術館館長も兼任した。1961年にロンドンで81才で亡くなった。かれの研究業績には『日本の古仏画*Die altbuddhistische Malerei Japans*』1921年等[8]の日本美術関連書の刊行があげられるが、最も大きな成果といえるのは、日本美術史家および東洋美術史家オットー・キュンメルとともに、ベルリンに設立された「東亜美術協会 Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst」の機関誌『東亜雑誌 *Ostasiatische Zeitschrift*』を編集したことであろう。その期間は1912年から35年までにわたっている。さらに1934年から４年間その「東亜美術協会」の秘書としても活動していた[9]。雑誌の編集は亡命後にも継続され、オックスフォードにおいても『オリエンタル・アート *Oriental Art*』を共同編集した[10]。

グスタフ・ヤコビーとヘルベルト・ギンスベルクについてだが、管見の範囲でかれらの関連資料はほとんど見当たらない。ヤコビーに関してわずかに探し出せたヴォルフガング・クローゼの論文によれば、ヤコビーは1856年にベルリンで生まれ、1921年に同地で亡くなっている。駐日大使であったが、在日中に多くの日本の工芸品を蒐集し、20世紀初頭の時点では、特に刀剣や刀の鍔と漆工芸の分野でかれのコレクションを凌ぐものはなかったとされるほどの数を蒐集していた[11]。かれの多くの作品は現在ハンブルク装飾工芸美術館に所蔵されている。一方ギンスベルクについて『東亜雑誌』によれば、かれは銀行家だったとされ、その立場を買われて「東亜美術協会」の会計係として学会の事務的な運営に尽力を注いだ。２人に関しては残念ながらそれ以上のことは現在のところ判明できていない。

クルト・グラーザーは医者かつ美術史家であり、ベルリン美術図書館長に就任した人物である[12]。1879年にライプツィヒに生まれ、1897年から1907年までフライブルク、ミュンヒェン、ベルリンで医学と美術史を学び、1902年に医学で学位を取得し、その後美術史家ヴェルフリンのもとで1907年にハンス・ホルバインについての論文で学位を授与されている。1924年からはベルリン版画コレクションの美術図書館長に就任した。1918年から33年まで新聞『ベルリナー・ベルゼン・クリエール *Berliner Boersen-Courier*』の美術評論家

として活躍し、「エドヴァルド・ムンク Eduard Munch」1913年、『ルーカス・クラナハ *Lukas Cranach*』1921年等もまとめている[13]。しかし1933年になると民族的な問題から立場を追われ、スイス、フランス、イタリアを経由してアメリカに亡命し[14]、1943年に亡命先のレイク・プラシッドで亡くなった。

グラーザーのアジアへの関心は、早くから認められ、学位取得後に、東洋に勉学のため1年間日本に滞在して、1908年に『日本絵画における空間表現 *Die Raumdarstellung in der japanischen Malerei*』、1913年に『東洋美術 *Die Kunst Ostasiens*』等をまとめている。またグラーザーがベルリン美術図書館長に就任し、特に日本の浮世絵を蒐集したことで、のちにそれが同図書館の専門的な特徴になった、とされる。後述するユダヤ人画商のティコティンとも友好的な関係にあり、ティコティンの計画した日本美術展覧会を雑誌でとりあげて批評したり[15]、フリッツ・ルムプフ、フリードリヒ・ペルツィンスキー、佐野和彦の寄稿した『日本の劇 *Japanisches Theater*』を1930年に編集している[16]。

パウル・フォン・メンデルスゾーン＝バルトルディについては、現時点では関連する資料を探すことができていないため、1875年にベルリンのメンデルスゾーン銀行を設立した家系のひとりとして生まれ、銀行家であったこと、美術作品を蒐集していたこと、そして1935年にベルリンに亡くなったことのみが指摘できる[17]。日本美術も蒐集していた彼の具体的な作品については残念ながら不明である[18]。

F.W.K. ミュラーは1863年にポーランドの国境近くのフランクフルト近郊ノイダムに生まれ、1930年にベルリンで亡くなった東洋学者、かつ人類学者である[19]。1883年にはベルリン大学で神学と東洋の語学を学びながら、哲学と歴史にも関心を示し、1889年にライプツィヒ大学にて学位を取得した[20]。1887年にはアドルフ・バスティアンの指示のもとに民族学博物館の臨時職員としてかかわるようになり、その後1896年には館長補佐に、1906年には東洋部門長まで昇りつめ、1928年に退職した。1901年には行政上の目的で、中国、日本、韓国を訪問した。また1923年には雑誌『アジア・メジャー *Asia Mejor*』をドイツの東洋学を集成する形で創刊した。現在のところ、かれのより詳細な研究成果は見出せていない。

オスカー・ミュンスターベルクは1865年に現ポーランドのダンツィヒに生まれ、ミュンヒェンとフライブルク大学で国民経済と美術史を学んだ企業家かつ日本美術史家である。特に日本美術史家として1896年に『日本美術と日本国 *Japanische Kunst und Japanisches Land*』、1908年には『日本の美術 *Japanische Kunst*』を刊行している。前者の書物は、日本美術の紹介を文化という視点からまとめられているが、ドイツではかなり早い段階での日本美術を扱った例として注目される。また後者は、豊富な図版を掲載しつつ時代区分によって日本美術史を概説したものとして高く評価される書物である。ミュンスターベルクは1920年に亡くなっており、第三帝国時の動向とは直接的な関連はない。

オスカー・ナホッドは1858年に生まれた歴史家、文化史家、司書学の専門家とされ、1933年に亡くなっている。かれは御雇外国人でもあり、1899年に来日している[21]。かれの業績として『日本書誌 *Bibliographie von Japan*』1928年があげられるものの、残念ながら

これ以上の情報は現在入手できていない。

エミール・オルリクは画家・版画家として日本でも知られる作家である。オルリクは1870年にプラハに生まれ、ミュンヒェンで版画を学んだ。その後ウィーン、ベルリンの分離派のメンバーとなり、グラフィック・アーティストとしてポスターやカレンダーなどを制作した。オルリクは木版画の技術習得のために実際に1900年から1901年まで来日している。その後も日本には1912年に訪問して親日ぶりを明示している。ベルリン工芸美術館付属学校のグラフィック・クラスを担当しており、その時の弟子として、日本美術研究者で版画家のフリッツ・ルムプフがいる。1932年にベルリンで亡くなっている[22]。

フリードリヒ・ペルツィンスキーは日本でも珍しい「面」に関する研究書を早い段階でまとめた研究者であり、2007年にかれの研究が法政大学野上豊次郎記念館と吉田次郎氏より翻訳され、またその際にその出自が西原春夫氏によって紹介された[23]。西原氏によると、ペルツィンスキーは1877年にベルリンに生まれたとされる。かれは、父の事業の破産という苦しい家庭状況のなかで、数年間書店を営み、そして以前から高い関心を抱いていた日本美術に関する書物を執筆したという。1904年に『北斎 *Hokusai*』を刊行後、日本美術作品をコレクションしようと計画したブレーメン美術館の依頼で1905年に来日し、多くの文献資料を渉猟しながら1年間滞在し、日本美術作品を蒐集した。戦後1924年には大学入学資格がなかったものの、ハンブルク大学で『日本の演劇の仮面 *Japanische Theater Maske*』で博士号を取得し、その後北京に赴き、そこで美術品の取引業に従事したという。自らの東洋美術品のコレクションを1929年にニューヨークで競売に出して以降[24]、彼の存在は忘れさられていったとされる。ユダヤ人であることからドイツでの生活を追われ、イタリア、スペインを経て、1942年にはブエノス・アイレスに至り、そこで1962年頃に生涯を終えた。

ヨーゼフ・シュトスゴフスキーは1862年にポーランドのイアラで生まれ、ウィーンで1941年に亡くなっている。ウィーン学派のひとりとされ、研究視野をヨーロッパのなかでは北ヨーロッパに広げ、さらに世界のなかではオリエント美術にまで拡大して、比較美術史学を目指したことで評価された[25]。日本美術に関する業績として1907年の『現代の造形美術 *Die bildende Kunst der Gegenwart*』がある。そのなかで当時の現代美術を伝統との関連で着目しただけでなく、さらにそれをペルシャやエジプトの古美術とともに、中国や日本の古美術と比較して検討することで、現代美術の価値の高さを提示した[26]。

フェリックス・ティコティンは1893年に生まれ、1986年にスイスで亡くなった画商だが、特に日本の浮世絵に魅せられ、浮世絵を蒐集した蒐集家でもある[27]。1927年にはすでにベルリンに画廊を開業し、前述したようにユダヤ人のグラーザーとも関係を持って、自らの日本絵画の展覧会を公開している。また日本の妖怪を描いた浮世絵による展覧会や活け花の展覧会等を開催して日本美術や文化の流布に貢献した[28]。1937年に来日しているが、私見ではその詳細は不明である。第二次大戦中にデン・ハーグへ移り、その後イスラエル・ハイファ、そしてスイスに居住した[29]。かれのコレクションは現在イスラエルと日本の山口県立萩美術館・浦上記念館において見ることができる[30]。

カール・ヴィートはドイツの近代美術コレクションで知られるハーゲンのカール・エルンスト・オストハウスの協力者でもあり、1913年に研究のために来日した際にはフォルクヴァング美術館のための作品も購入している。日本美術との関係では、1921年にケルンに設立された東洋美術館の日本の彫刻のために学術的な協力をおこなっている。その後1925年からケルンの職業学校で日本および東洋美術史を講じていた。1928年にはケルン応用美術館の館長に就任し、1931年には職業学校の校長となった[31]。1918年にヴィートは「8世紀初頭までの日本の初期の仏像について」のタイトルでウィーン大学に博士論文を提出した。その研究は翌年の1919年に『日本の仏教彫刻 *Buddhistische Plastik in Japan*』として刊行され[32]、1923年までに三版も増版された。この書物では6世紀末の飛鳥時代から8世紀の奈良時代までの作品が対象とされ、主に個々の作品とその形式等が解説された[33]。新たに問題点を指摘してその仮説を提示するような内容ではなく、いわば古代彫刻史の概説書の性格を示すものである。

1．2．ユダヤ人研究者の特徴

前述した13名のユダヤ人たちの活躍からは、日本美術に対する様々な立場が見出せるものの、それらは大きく次のような四つの立場に分けることができる。コーン、ミュンスターベルク、ミュラー、ペルツィンスキー、シュトスゴフスキー、ヴィート、といった研究者の立場、メンデルスゾーン＝バルトルディ、ティコティン、ヤコビーの蒐集家の立場、ギンスベルクの愛好家の立場、オルリクの作家の立場である。この分類から第一に指摘できるのは、日本美術に関係する人物のなかで研究者の数が6名と最も多く、しかもそのなかに近代ドイツの日本美術研究者を代表する人物が含まれていることである。周知のように西洋美術史家にはヴァールブルクをはじめ、パノフスキー、クラウトハイマー等のユダヤ人が認められ、彼らは美術史学のなかで新たな方法論を提示するなどの重要な役割を担っていた[34]。同様にミュンスターベルク、コーン、ヴィート、ペルツィンスキーは、ドイツでの日本美術研究の基盤をなした研究成果をあげている。ミュンスターベルクはまだ民族的あるいは文化史的な内容で日本美術が紹介されることの多い20世紀のかなり早い段階で、独語による日本美術史の概説書をまとめていた[35]。コーンは日本の仏画や大和絵等といった専門性を高めたテーマで詳細な概説書を刊行しており、ヴィートはウィーン大学美術史科で日本彫刻史をテーマにして提出した博士論文を、後にそれを書籍にまとめている。ペルツィンスキーは日本でも希有な能面に関する詳細な研究書を早い段階で書き留めている。こうしたかれらの研究テーマとなった日本美術の領域は、従来の江戸期の浮世絵や工芸品に限定されるものでなく、古美術、特に純正美術といわれる大和絵や水墨画、彫刻等にも対象が広がっている。そこには、単に日本美術を扱う範囲が広がったということに終わらず、従来の工芸や浮世絵版画を中心としてきた日本美術を、純正美術の歴史を語る西洋美術と対等の価値観に置こうとする新たな視点が存在している点で注目される。

このようにユダヤ人の日本美術研究者は、日本美術に対して総合的な視野を保持していたと同時に、本格的な日本美術の研究に取り組んでいたということができる。なお、西洋

美術の歴史そのものに疑問を呈して西洋美術の根源をアジアに求めたシュトスゴフスキーが、中近東美術の研究の流れを受けて日本美術にも目を向けていたことは見逃せない。

分類から指摘できる第二の点は、ユダヤ人の日本美術研究者に限らず、上記に提示したユダヤ人の全員が、当時のヨーロッパのなかでも東洋美術を研究する上で重要な研究機関である「東亜美術協会 Gesellschaft für Ostasiatische Kunst」の会員だったことである。「東亜美術協会」は1926年にベルリンに設立された研究機関であり、戦前には千名を超える会員を誇り、東亜とはいえ研究の中心に日本美術が置かれていたことは別稿において詳述したとおりである[36]。また「東亜美術協会」には東洋美術史家ル・コックや日本からも福井利吉郎、上野直昭、伊東忠太等の研究者も所属していたため、かれらの研究も同協会の雑誌や例会をとおして随時紹介されており、まさに「東亜美術協会」はヨーロッパにおける日本美術研究を先導した研究機関だったといえる。1929年時の「東亜美術協会」の名簿やそれ以前の『東亜雑誌』をみると、上記の全員の名前を見出すことができるのである。さらにこの学会には研究者に限らず蒐集家や愛好家と思われる立場から会員であった、たとえば銀行家ロートシルドのようなユダヤ人の存在も認められる[37]。

留意したいのは、前述したギンスベルクはこの学会の運営において重要な会計を担当し[38]、コーンは学会機関誌『東亜雑誌』の編集にドイツ人のキュンメルとともに初版から36年まで尽力しており、「東亜美術協会」の運営に直接かかわっていたことである。そのことから、学会のなかで特に人種的差別もなく、むしろユダヤ人が活躍しやすい状況が確認される。

以上のように、日本美術にかかわるユダヤ人たちのなかには、早くから自らの研究のスタンスを学術的組織のなかに置いて、本格的な研究をすすめた日本美術研究者がいたことが確認できる。またかれらの多くは「東亜美術協会」という研究組織に所属していたが、そのなかにあってもユダヤ人が会計や機関誌の編集といった重要なポストにも配置されており、当時の日本美術研究を推し進めるなかで、ユダヤ人の研究者はかなり重視された存在だったことが理解できる。それと同時に戦前において「東亜美術協会」という組織のなかでは、少なくとも人種的な差別は認められず、ドイツ人研究者と特別の問題もなく、ユダヤ人が日本美術研究をすすめていたことが認められ、日本美術研究において重要な研究機関であった「東亜美術協会」はユダヤ人が深くかかわる組織だったことが理解される。

2．第三帝国下でのユダヤ人研究者と日本美術研究

2．1．「伯林日本古美術展覧会」とユダヤ人研究者

日本美術に関するユダヤ人研究者に大きな変化が見出せるようになるのは、一般的なユダヤ人と同様に、ヒトラーが政権を握りドイツが第三帝国となってからのことである。ヒトラーは自国領土拡大のために日独防共協定をはじめ日独伊三国同盟を締結し、日本とは密接な政治関係を求めてゆく。しかしそれ以前のドイツにおいて、日本は特別の国ではなかった。極東では元々中国との関係の方が顕著であったが、しかし政治状況の変化にともない、日本との軍事関係の緊密さが求められたヒトラーは、自国民に日本との友好関係の

必要性を訴えることを迫られたのである[39]。その際にかれがとった方法のひとつが、文化交流であった[40]。つまり、ドイツにとって重要なパートナーとなり得るだけの文化的質を備えた国として、日本のイメージ化がすすめられていったのである[41]。

その最たる例のひとつが1939年に開催された「伯林日本古美術展覧会」だった。この展覧会では従来と異なり、日本人からしても質の高い内容にこだわり、純正美術に限定して展示することを目的にして、実際に当時の国宝、重要美術品に指定された多くの肖像画、仏画、そして彫刻が出陳された[42]。

この展覧会を実現した中心人物は、ベルリン美術館群総長のオットー・キュンメルである。かれが早くから日本の純正美術に魅せられ、それら本物の純正美術作品をドイツで観賞する機会を得たいと考えたことが、展覧会の開催に結びついた。キュンメルと「伯林日本古美術展」についてはすでに別稿で詳述している[43]。

とはいえ、もちろん「伯林日本古美術展」は、キュンメルの力だけで実現したのではない。こうしたキュンメルの思いをきっかけにして、さらに様々な周囲の協力によって開催にこぎつけた。この展覧会の目的となる「日本人からしても質の高い展覧会」を把握し得るだけの観衆の確立には、上記のユダヤ人、特にコーンとヴィート、ミュンスターベルクの研究も大きな意味を持ったと推察される。すなわち、キュンメルやかれの師であるエルンスト・グローセは早くから水墨画や大和絵をとりあげて書物のかたちで概説していたが[44]、そのなかには、展覧会に実際に出陳された作品も含まれていた。そのため、水墨画と大和絵に関して、当時の展覧会の観衆者は、ある程度そうした書物をとおして観賞の基礎知識を事前に身に付けることができていた、と考えられる。同様に、コーンはキュンメルやグローセの手がけていない日本の肖像画や仏画に注目して、早い時期にそれらの概説書をまとめており、しかもそこで紹介された作品のなかには、その後1939年の展覧会に出陳されたものが多く含まれていた。またヴィートもキュンメルやグローセが具体的に考察し得なかった日本の仏像を研究し、その成果を1919年にまとめており、しかもその書籍はわずか4年の間に3版まで増版されているほどの評判を得ていた[45]。その書籍のなかには、展覧会に出陳された作品がわずかであるものの、紹介されている。キュンメルとは敵対した間柄といわれるミュンスターベルクは、早い段階で日本美術の歴史を概説していたが、その際にも、後の1939年の「伯林日本古美術展覧会」に出陳される雪村筆《風濤図》が紹介されていた。

このように、1939年の展覧会を観賞する当時のドイツ人は、質の高い日本の純正美術作品に対する基礎知識を事前に得ることができた。それに貢献したのがキュンメルを含め、コーン、ヴィート、ミュンスターベルクといったユダヤ人の日本美術研究者の研究成果だった、と考えられる。

2．2．「伯林日本古美術展覧会」以後の日本美術研究とユダヤ人研究

「伯林日本古美術展覧会」が開催された1939年にはすでにミュンスターベルクは亡くなり、コーンもヴィートもドイツから離れていた。コーンは1938年に英国へ、ヴィートもお

そらくほぼ同年頃に米国へ亡命していた[46]。

ユダヤ人のメンバーが多く認められた「東亜美術協会」においても、ナチス時代に入ると会員数が年々減少し続け、1938年以後は大幅に減っていった[47]。もちろんそのなかにはコーンやヴィートのようなユダヤ人の亡命も含まれていた。

当時の第三帝国は1939年９月にはポーランドに侵攻して第二次世界大戦へと突き進み、1940年に日本およびイタリアとの軍事協定の三国同盟を締結し、さらなる領土拡大を見据えて戦況を悪化させていった。それに伴いユダヤ人の迫害も激しさを増していき、1942年にはヴァンゼー会議においてユダヤ人問題の「最終的解決」が決定され、事実上のユダヤ人の大量虐殺が実施されていった[48]。この時期の日本美術の研究状況に目を向けると、純正美術を中心とした日本美術での評価が見られなくなる。それらに変わって映画や演劇が新しい文化の担い手となって注目されていき、日独合作映画が登場したり、関連した演劇が上演されるようになった[49]。

とはいえ、日本美術の紹介される機会が完全になくなったわけではなかった。その点については別稿ですでに確認しているが、ここで改めて記すと、たしかに1939年以後にも日本美術に関する展覧会が開催されている。ただしその場合に1939年の展覧会の如くに純正美術を主とするものではなく、それにかわって第三帝国での民衆芸術の文脈に乗せられるかたちで、特に浮世絵等を中心に紹介する展覧会や書物は存在していたのである。その立場を代表したのが、ドイツ人版画家で日本美術史家フリッツ・ルムプフである[50]。かれは来日以来、民衆の芸術の開花した江戸期、特に浮世絵に魅せられて、書物や展覧会をとおしてその浮世絵の評価に貢献したが、その視点はまたナチスの民衆芸術と合致することにもなった。浮世絵に対する評価はルムプフ以前からヨーロッパでは一般的に認められてきていることから、特に新しい動きとは言えない面があるため、むしろ従来の日本美術評価に再びもどったというべきなのかもしれない。

このように1939年以後のドイツの日本美術研究の状況を見ると、純正美術に注目した研究ではなく、日本文化が主体となり、そして全体では美術より映画、演劇にとって変わられてゆく[51]。そのなかで美術は再び、浮世絵といった江戸時代の庶民文化に注目が集まっていくことになる。それはまさにナチスドイツの民衆芸術に迎合するものともいえる。それをすすめたのはユダヤ人ではない研究者であった。こうしたことからも、ユダヤ人研究者はドイツの日本美術研究のなかで、特に日本の純正美術に注目した研究に大きく貢献したということが改めて確認できるだろう。

おわりに

ドイツにおける日本美術研究の分野には、ユダヤ人の存在が認められた。かれらは特に従来のヨーロッパの日本美術研究に対して、純正美術を考察対象とする研究をすすめ、日本美術の評価を西洋美術と同等のレヴェルまで高める試みをおこなっていた。そうしたユダヤ人の研究者がナチス政権の成立以前に亡くなったり、あるいはその政権下で行き場を失い、亡命を余儀なくされていった。かれらの亡命以後の日本美術研究では純正美術を対

象とすることなく、ジャポニスムの動向を継続するように、再び応用美術の、特に浮世絵が研究されていくことになった。

第三帝国体制以前には、ユダヤ人研究者も日本美術研究領域のなかで特別な人種差別を受けることはなかった。しかしナチスドイツ政権下に入り、すぐに研究者の間で人種差別が行なわれたわけでなかったものの、最終的には国家政策の下でかれらは亡命せざるを得なくされた。そして、そうしたユダヤ人の存在を失うことによって、日本美術研究の内容も、純正美術にまで考察対象が広げられたにもかかわらず、再び従来の浮世絵中心に戻ってしまう。つまり、人種的な差別の跡は、日本美術研究界には亡命以外に見出し得なかったが、研究内容にはそれが表面化していたともいえるのである。いいかえれば、日本美術研究においてユダヤ人は純正美術へと考察対象を広げることに貢献したのであり、それゆえにユダヤ人の亡命後は、再び浮世絵中心の研究へと限定されていった可能性が考えられる。したがって、純正美術への考察の対象を広げていったドイツでの日本美術研究の進展には、ユダヤ人が大きな役割を担っていたことを結論として提示する。

本稿は科研基盤研究C（「日本美術受容と政治戦略－ドイツ第三帝国下での日本美術受容の展開－」）による研究成果の一部である。

1) Deutsche-Japanische Kulturbeziehunge von Dr. Walter Donat am 8. Juli 1943, Bundesarchiv 129/8, 10953, Nr. 322/3.

2) 「伯林日本古美術展」については以下を参照。拙稿「ベルリンにおける日本古美術展覧会」『美術史』147号、1999年、124-137頁。

3) 個人的な研究が徐々にすすめられているが、日本美術とユダヤ人というアプローチでの研究は見られない。Hrsg.v.Günter Haasch : *Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften von 1888 bis 1996*, Berlin 1996.

4) Hrsg.v.Günter Haasch, a.a.O., S. 195–206.

5) 『西洋美術研究　特集美術史とユダヤ　No. 4』三元社、2000年。

6) Hrsg.v.Günter Haasch＝註3, a.a.O., S. 198.

7) Hrsg.v. Renate Heuer: *Archiv Bibliographia Judaica, Lexikon deutsch-jüdischer Autoren*, Bd. 5. München 1997, S. 250–253. Hrsg.v. Herbert A. Strauss :*Biogpraphisches Handbuch der deutschsprachigen Emigration nach* 1933, München 1999, S. 192.

8) William Cohn: *Altbuddhistische Malerei Japans*, Leipzig 1921. William Cohn: S*tilanalysen als Einführung in die japanische Malerei*, Berlin 1908.

9) 1933年にアカデミーの地位をレッシングによって奪われたとされるが（Hrsg.v. Herbert A. Straus＝註7, a.a.O., S. 192.）、その具体的な内容については不明である。

10) Hrsg.v. Walther Killy: *Deutsche biographische Enzyklopädie*, München 1995, S. 353.

11) Wolfgang Klose: Philanthropy and Passion: Gustav Jacoby and his Japanese Art, in:

Orientations Volume 37, Nr. 7, 2006,

12) Hrsg.v. Walther Killy＝註10, a.a.O., S. 24. Hrsg.v. Renate Heuer: *Archiv Bibliographia Judaica, Lexikon deutsch-jüdischer Autoren*, Bd. 9. München 2001, S. 3–6.

13) Curt Glaser: Eduard Munch als Graphiker, in: *Kunst und Künstler*, XI, II 1913, S, 570–578. , Curt Glaser: *Lucas Cranach d.Ä, Handzeichnungen, München* 1923.

14) Hartmut Walravens: Curt Glaser, in: Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin: *Du verstehst unsere Herzen gut, Fritz Rumpf (1888–1949) im Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen*, Berlin 1989, S. 99f.

15) Curt Glaser: Ausstellung japanisher Bilder in der Kunsthandlung Tikotin, in: *Pantheon*, 5. 1930, S. 31. Hartmut Walravens:＝註13, a.a.O., S. 99f.

16) Hrsg. v. Curt Glaser: *Japanisches Theater*, Berlin 1930. なおマックス・ベックマンが彼の肖像画を描いている。

17) Julius H.Schoeps: Dieses Bild gehörte uns, in: *Cicero*, März, 2005

18) 補足として、美術作品の蒐集では、特に損保ジャパン東郷青児美術館のゴッホの《ひまわり》を所蔵していたことが追記できる。

19) Hrsg.v. der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften: *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 18. , Berlin , S. 381f.

20) ミュラーはベルリンに所蔵される手稿から、シメオン・サングラヴァヤの年代記をまとめて学位論文にしたとされる（Hrsg.v. der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften＝註19, a.a.O., S. 381f. ）。

21) 宮永孝『日独文化人物交流史』三修社、1993年、427頁。

22) 『東京－ベルリン／ベルリン－東京展』2006年、展覧会図録、341頁。

23) ペルツィンスキーについては、以下の書物を参照のこと。西野春夫「〈解説〉東洋美術史家フリードリヒ・ペルツィンスキーの能面研究」F・ペルツィンスキー／吉田次郎訳野上記念法政大学能楽研究所監修『日本の仮面　能と狂言』法政大学出版、2006年、571–574頁。Hartmut Walravens: *Friedrich Perzynski (1877–1962 ?) Kunstohistoriker, Ostasienreisender, Schriftsteller Leben-Werk-Briefe*, Melle 2005.

24) この競売の反響は思わしくなかったという（西野春夫前掲文＝註23、571–574頁）。

25) Peter Betthausen u.a.: *Metzler Kunsthistoriker Lexikon*, Stuttgart 1999, S. 400ff.

26) Josef Strzygowski: *die Bildende Kunst der Gegenwart*, Leipzig 1907, S. 81, 82, 126.

27) ティコティンについては、以下を参照のこと。矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文芸春秋社、1961年、217–249頁。『開館一周年記念　チコチンの浮世絵　－新収蔵品展』展覧会図録、1997年。Felix Tikotin: Erinnerungen eines Sammlers, in: Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin: *Du verstehst unsere Herzen gut, Fritz Rumpf (1888–1949) im Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen*, Berlin 1989, S. 118–124.

28) Felix Tikotin＝註27, a.a.O., S. 118–124.

29) 鈴木重三氏は、ティコティンが1931年にベルリンに画廊を開いたと指摘しているが（鈴木重三「チコチン・コレクション私観」『開館一周年記念　チコチンの浮世絵－新収蔵品展』展覧会図録、1997年、10頁）、論者の調べては1927年には、日本の妖怪展をベルリンの画廊で行い、その図録を刊行しているため、本文では、1927年と訂正している（Felix Tikotin: *Japanisches Gespenster*, Berlin　1927.）。

30) 『開館一周年記念　チコチンの浮世絵　－新収蔵品展』展覧会図録、1997年を参照。

31) Horst Möller: The Arts and the Humanities in Exile and Return　1933-1980, in: Hrsg.v. K.G. Sauer: *International Biographical Dictionary of Centrale European Emigres 1944-1945*, II The Arts, Sciences and Literature , München 1999, S. 1253.

32) Karl With: *Buddhistische Plastik in Japan*, Wien 1919.

33) Karl With: a.a.O.

34) かれらの活躍については以下を参照。ウード・クルターマン『芸術論の歴史』神林恒道他訳、頌草書房、1993年。Karen Michels: Transfer umd Trransformation: die deutsche Periode der amerikanischen Kunstgeschichte, in: Hrsg.v. Stephanie Barron: *Exil, Flucht und Emigration europäischer Künstler 1933-1945*, München, 1997, S. 304-315. . Kevin Parker : Die Kunstgeschichte und das Exil: Richart Krautheimer und Erwin Panofsky, in: Hrsg.v. Stephanie Barron: *Exil, Flucht und Emigration europäischer Künstler 1933-1945*, München, 1997, S. 316-325.

35) しかもその時代区分は日本美術史のはじまりとされる『日本帝国美術略史』に近い方法がとられているという特徴を示している。

36) 東亜美術協会については拙稿を参照。拙稿「ドイツの「東亜美術協会 Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst」（1929～1942年）にみる日本美術の動向」『別府大学紀要』第44号、2003年、69-83頁。

37) 4. Mitgliederverzeichnis, abgeschlossen nach dem Stande von 1. Oktober 1929.

38) なお会計をユダヤ人が担当していることからは、ユダヤ人と金融業界との関連が歴史的に指摘されてきていることを思い起こさせる。

39) ナチスの極東戦略については以下を参照。田嶋信雄『ナチズム極東戦略　日独防共協定を巡る諜報戦』講談社選書メチエ96、1997年。

40) その裏付けとしてナチスは1938年に日本との間で文化協定を結んでいることもあげられる。なお、拙稿「ベルリンにおける日本古美術展覧会」『美術史』147号、1999年、124-137頁も参照。

41) たとえば、三宅正樹氏は、ナチスと日本との軍事同盟の背景に言及する際に、人種的な問題が政治戦略に深く関わったとして「文化的にドイツより劣っている筈の日本との軍事同盟を結んで、文化的にドイツと対等の筈の英国を敵に回して戦わねばならなかったおことは、ヒトラーの心中に苦いものを感じさせずにはおかなかったであろう。」と述べている（三宅正樹『日独政治外交史研究』河出書房社、1996年、162頁）。

42) 拙稿「ベルリンにおける日本古美術展覧会」『美術史』147号、1999年、124-137頁。

43) 拙稿同論文、124-137頁。

44) たとえば以下を参照。Ernst Grosse: *Die ostasiatische Tuschmalerei*, Berlin 1922.

45) Karl With＝註32, a.a.O., Wien 1919, S. 198.

46) Hrsg.v. Renate Heuer＝註7, a.a.O., S. 250-253. Karen Michels: Transfer umd Trrans-formation: die deutsche Periode der amerikanischen Kunstgeschichte, in: Hrsg.v. Stephanie Barron: *Exil, Flucht und Emigration europäischer Künstler 1933-1945*, München, 1997, S. 304-315.

47) 拙稿「ドイツの「東亜美術協会 Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst（1929年～1942年）にみる日本美術の研究動向」『別府大学紀要』第44号　2003年、70-71頁を参照。

48) 成瀬治、山田欣吾、木村靖二編『ドイツ史３』山川出版社、1997年、292-293頁。

49) 拙稿「第二次世界大戦中の日独双方による日本のイメージ戦略の一考察　－日本美術史家フリッツ・ルムプフの活動をとおして－」『別府大学紀要』第47号　2005年、23-36頁を参照。

50) 拙稿「第二次世界大戦中の日独双方による日本のイメージ戦略の一考察　－日本美術史家フリッツ・ルムプフの活動をとおして－」『別府大学紀要』第47号　2005年、23-36頁を参照。

51) 拙稿「ドイツ第三帝国における日独文化交流と日本美術　－日独文化協会発行『日独文化』を資料にして－」『別府大学大学院』第９号、別府大学会、2006年、37-46頁。

【表】 日本美術に関係するユダヤ人

氏　名	分　類	関連分野	生没年・場所	亡命時期	亡命先	亡命先での所属	亡命前
ウィリアム・コーン	研究者	純正美術	1880ベルリン－1961ロンドン	1938	英国	オックスフォード大学	東亜美術協会編集担当
William Cohn	日本美術史家	絵画、彫刻			England.	Oxford Univ.	
グスタヴ・ヤコビー	蒐集家	応用美術	1856ベルリン－1921ベルリン	—			
Gustav Jacoby	在日駐在大使	陶器・刀剣・漆器					
ヘルベルト・ギンスベルク	愛好家	不明	不明	不明		不明	東亜美術協会会計担当
Herbert Ginsberg	銀行家						
クルト・グラーザー	研究者	応用美術	1879ライプツィヒ－1943レイク・プラシッド	1933以後	アメリカ	不明	ベルリン美術図書館長
Curg Glaser	医者・日本美術史家	浮世絵					
パウロ・フォン・メンデルスゾーン＝バルトルディ	蒐集家	応用美術	1875ベルリン－1935ベルリン	—			
Paul von Mendelssohn-Bartholdy	銀行家	工芸・浮世絵					
F.W.K.ミュラー	研究者	不明	1863ノイダム－1930ベルリン	—			ベルリン民族博物館東洋部門長
F.W.K.Müller	東洋学者						
オスカー・ミュンスターベルク	研究者	純正・応用美術	1865ポーランド、ダンツィヒ－1920	—			
Oskar Münsterberg	日本美術史家						
オスカー・ナホッド	研究者	特定不可	1857－1933	—			
Oskar Nachod	歴史家						
エミール・オルリク	作家	応用美術	1870チェコ・プラハ－1932ベルリン	—			
Emil Orlik	画家・版画家	浮世絵					
フリードリヒ・ペルツィンスキー	研究者	純正美術	1877ベルリン－1962アルゼンチン・ブエノス・アイレス	1942以前	アルゼンチン	不明	
Friedrich Perzynski	日本美術史家	面					

氏　名	分　類	関連分野	生没年・場所	亡命時期	亡命先	亡命先での所属	亡命前
ヨーゼフ・シュトスゴフスキー	研究者	応用美術	1862ポーランド・イアラ－1941ウィーン	—			
Josef Strzygowski	西洋、東洋美術史家	浮世絵					
フェリックス・ティコティン	蒐集家	応用美術	1893－1986スイス	大戦中	スイス		ベルリン画廊経営
Felix Tikotin	画商	浮世絵					
カール・ヴィート	研究者	純正美術	1891－？	1938前後	アメリカ	パサデナ、カリフォルニア·デザイン大学院	ケルン応用美術館長・ケルン職業学校校長
Karl With	日本美術史家	仏像				California Graduate School of Design in Pasadena	

参考文献

Hrsg.v. Renate Heuer: Archiv Bibliographia Judaica, Lexikon deutsch-jüdischerAutoren, Bd. 5. Bd. 9 München.

Hrsg.v. Herbert A. Strauss:Biographisches Hand buch der deutschsprachigenEmigration nach 1933, München 1999.

Hrsg.v. Walther Killy: Deutsche biographische Enzyklopädie, München 1995.